

## 飲酒に関する風潮、社会的認識等についての意見

- 文化として、お酒が飲めるというと、いい評価、褒める方向に行く。それにより、飲めない人は飲めないことをコンプレックスに思うかもしれない。  
飲めないというのがマイナスのイメージという文化は変えるべきか、変える必要はないのかわからないが、スタートがそこだということ踏まえた上で広報をかけていかないと、また空回りになる。
- 今まで漠然と、たくさんお酒を飲めるということがいいようになっていて、その流れの中で、弱いのにアルコール依存症に走ってってしまう人はたくさんいたと思う。  
強いことがいいことではないとか、そのようなキャッチコピーとか、何らかの形でやはり触れたほうがいいと思う。でないと、今までどおり、幾ら数字や何かを変えても、基本が変わらないような気がする。
- 逆にアルコール依存症のこういったことがじわじわ問題だと言われていることによって、形を変えてお酒の文化がゆがめられるより、はっきりと、ダメなところはだめだ、だけれども、楽しく、おいしく、本当にいい時間を過ごすということが逆に明確になったほうが、いいのではないかと。
- 喫煙・飲酒・薬物乱用と言いましたが、その中で、たばこや薬物などはダメだとなっているが、アルコールは肯定される時期が来てしまう。その部分を本当に真剣にここで議論して、そこまで否定するのか、それとも不適切なという一言でおさめてしまうのか。
- 繰り返しになるが、薬物は絶対だめ、たばこも健康に悪い、アルコールは？という部分を何か少し明確にできれば、もう少し進むのだろうと思う。  
個人の問題ということだけではなくて、社会共通の認識につながれば、法がきちんと整備されたという意義があるのだろうと思う。  
ただ、到達点が私たちとしても正直わからない部分があり、社会一般の共通の認識というものができていない。ある一定のキャッチコピーにするのか、スローガンのなものにするのか、何か共通認識を持てればいいと思う。
- 適切な量を休肝日を取りながら長く楽しんでいけるように飲んでいただきたいというのが私どもの願い。強いのが偉いとか、飲めないのが偉くないとか、これは私個人になってしまいますけれども、そういう感覚はない。

飲めないことを引け目に感じるようなことは、私はやはりそういう世の中は変えていったほうがいいと思う。

- 細く長く召し上がっていただくのが我々としては一番いいと思っている。毎日少しずつ、あるいは休肝日を設けて、おいしいお酒を健康に飲んでいただくというのが我々の願い。お酒が全部悪いわけではないと思っている。
  
- 教育啓発においても、CMとか売り方とかでも、さまざまなものに気をつけなければいけないというところで、共通のベースになるような、アルコールの何がリスクなのかというところを明確にすることが必要なのではないかということ。そして低リスクでアルコールとつき合う社会をつくるということについて、酒類業界もむしろ賛成するのだというようなお話だった。  
それが逆に、細く長くお酒とつき合っていただく社会になるのではないかというところは合意が見られたと思う。